



俳諧何姿
全

15
1981
940







5.



序



細くうらたぬきをくまに
 につらけし時々各記述
 致しむる心成感一
 葉成すも
 双葉をふり教ふ片りぬ

月夜深き時にも
いほやうなほに
高き原の遠く
いほすゝも
いほの世も
いほの世も
いほの世も
いほの世も

さうなほ
春の月
来子
来子

鬼貫

两吟

其乃翠羽都たろくも暮るは 愚貫

あををのまて 蝉の松原 鶏賀

深くぞ 蛭ぬと水乃名あり 全

秋ゆく 藤いおまひやうれ 愚貫

誰あはし 理しれうき 全

庭のぬ月君明々を一時 鶏賀

ア〜おめ〜道〜二三日 鶏賀

そのほ〜け〜め〜れ〜乃〜梅風 鬼貫

拜〜し〜方〜を〜う〜の〜臨〜心〜 全

世〜さ〜こ〜ら〜ゆ〜大〜年〜の〜れ 鶏賀

あ〜い〜わ〜せ〜井〜に〜何〜が〜び〜わ〜く〜の 全

は〜り〜と〜ま〜い〜ご〜い〜海〜あ〜い〜と 鬼貫

運〜半〜に〜流〜ち〜る〜さ〜す〜ら〜と〜な〜う 全

洞〜き〜り〜も〜ぶ〜び〜つ〜と〜皇〜忍〜じ〜や 鶏賀

お〜ま〜め〜め〜め〜日〜ふ〜い〜〜〜 夜子れお 全

ゆ〜え〜あ〜〜に〜極〜よ〜け〜り〜ら〜と 鬼貫

宵〜ふ〜と〜〜〜め〜徳〜後〜を〜さ〜れ〜ふ 全

胞〜を〜捨〜つ〜い〜ま〜〜向〜し〜た〜う〜 鶏賀

そ〜の〜後〜と〜い〜い〜う〜た〜を〜目〜の〜み〜れ 全

本〜有〜路〜乃〜あ〜さ〜ぶ〜い〜と〜候〜の 鬼貫

解〜く〜て〜氷〜を〜吹〜く〜あ〜れ〜月 全

陽〜り〜し〜ら〜れ〜〜双六にせう 鶏賀

おそひのむ、は、体、乃、真、た、ん、寺 鶏賀

田、極、園、子、が、教、者、の、く、け、や、く 鬼貫

一、つ、は、ど、れ、も、平、家、と、膝、立、な、み 全

狐、乃、や、い、ぐ、ん、ま、は、川、の、願 鶏賀

お、ま、い、つ、く、魂、を、あ、ら、わ、い、別、れ、い、ど 全

雙、乃、昔、く、づ、ふ、者、う、つ、つ、り、れ 鬼貫

種、の、妹、を、ま、ま、ま、く、捨、て、ま、は、け、ま、い 全

な、な、で、果、つ、が、ね、も、虫、乃、氣 鶏賀

お、ま、い、ど、い、の、湯、道、お、ま、い、や、月 全

何、里、夜、の、や、う、家、い、ど、ま、ま、 鬼貫

春、ま、い、つ、く、も、子、の、ま、ま、い、ど、ま、ま、 全

心、子、ん、と、病、を、愈、め、あ、ら、ま、の 鶏賀

ら、よ、も、出、る、鬼、あ、ら、ま、い、ど、ま、ま、 全

風、何、ま、ま、ま、石、乃、つ、ま、あ、て 鬼貫

こ、ら、く、と、山、乃、あ、ら、ま、い、ど、ま、ま、 全

一、夜、の、ゆ、よ、宿、い、ど、ま、ま、 鶏賀

居土乃説皆情の世後迄もろり 鶏賀

堅回小や節よ日初りや 恩貫

破もまぬ心乃垣之誰ゆつる 全

香よりささまよふ粟乃初地 鶏賀

夜とも映乃於輝よ終もねど 全

何ほゆりしもささめししと振 恩貫

腰乃多川中うら底うらねと 全

隠しつづける映^カ響いもげずい 鶏賀

夢しその花あるまのまじり物 全

室乃別はも一人も残と 恩貫

どんぐりもさあよ清志賀は月 全

何故にさしつる坊主耕 鶏賀

物とを在へはつら五六町 全

死あどくしの素もれもさく 恩貫

勝より肩つるまのさめつた 全

水一もつら流る果たしむ 鶏賀

三

こしらえぬ産まて四季此膚ウミを

鶏賀

鳴ナラ——ゆたなご法の山を

鬼貫

まぬ乃ひびきと今にま〜まぬ

全

あ〜〜羊城ス枕〜うあれ

鶏賀

まねたんごぶごは〜あのお

全

ちく淋〜まをぬ〜書

鬼貫

非〜〜と勝落ふ山〜増〜

全

海モヅク蘊〜れぐる底ま〜のほ

鶏賀

た〜〜乃髪多れま〜の居れ

全

ど〜〜らゆ〜〜付〜〜

鬼貫

^{ミウ}あれ根をまゆれと幽〜ゆ〜

全

今咲草〜馬乃喰〜

鶏賀

只居〜も日〜短〜と〜

全

月海止〜海箱のあ〜

鬼貫

終〜〜旅の敷〜の〜

全

〜〜白山〜凍〜と力〜

鶏賀

ひ束を記考がまよとや師まよや 鶏賀

隣の向よ夜もろ寝られぬ 鬼貫

是つよよあまのつよてよあまを内 全

橋があまこよ花へ出よて 鶏賀

は湯く揺乃立のの長栄よも 全

火爐の流乃之廣くよと只 鬼貫

月があけよ物まつよよ鐘の音 全

やよ取皆科よとあよん 鶏賀

名

木とまよふらまのそんてよむらう 全

人乃ころれ溜よられん 鬼貫

傾初後ぼん枕の輪くよい 全

連よかよまぬ生くよ結よ 鶏賀

神垣よ直よくよまよのに 全

月を突くよひらよ入ん 鬼貫

輝せりよの日のよいよ 全

雪乃响石とよよけよおと 鶏賀

行幸、民室に流し、忘れず
鶏賀

之後、是れを余も花々
鬼貫

す、ぬき、待て、あはれ、力たれ
全

於多、とて、まゐる、乃、止、占
鶏賀

赤、斗、や、ま、ま、狭共い、う、屋
全

月、乃、出、ま、連、と、新、で、も、如
鬼貫

石、山、や、海、の、底、た、も、機、乃、今
全

ふ、ま、ま、に、ま、い、の、ま、積、に、い、ふ
鶏賀

満

有、も、世、ぬ、人、心、が、ま、ま、し、く、
鬼貫

あ、る、乃、葉、屋、い、ま、ま、う、降、
全

後、も、や、次、ま、に、近、い、友、千、鳥
鶏賀

落、波、乃、市、の、押、け、り、の、程
全

雨、白、や、心、海、花、ま、ま、を、ま、ま、
鬼貫

暮、へ、か、り、も、春、ま、ま、う、月
鶏賀

鬼貫 五十

鶏賀五十

鶏賀亭いよわ

忘れがたし川原多乃下あは

百九

そよよとほくの目いさ中

鶏賀

炉も志たう一殊了鏡乃餅り

兩伯

お合あをさうわ

之白

あ〜〜夜を底にのまぬ部云

鬼貫

月白い程ゆ家川

青

原水

さうーもくまのあそびをすて

鶏賀

地乃やうまの味よりあれ

百九

海山を底にかゝり浦屋を

之白

早も灯を雲にらら

兩伯

洞骨乃ゆふくいやちり神

原水

まこととまがけ偽りの奥

思貫

覗くおすひげなま空車

百九

まのふり石りもふれちく

鶏賀

山を乃呼へる路より月い

兩伯

金剛杖があらお

之白

去るくもいへる路より去る

思貫

いへるもおれ大羊乃夢

原水

お買にそりくおん私やら

鶏賀

法師近遠にめと路

百九

松檜小目枝りく家朝月日

之白

根をたふぬ路て秋め

兩伯

姑乃わやく宥めく打ころを 原水

余取の取まがあら乃膏此簡 愚貫

床のあ解りそあぬ洞物や 百丸

う記鐘舎よ足れとめり 鶏賀

残の名乃一機きく物つむ 雨伯

く和法務まがくく窺ふ 之白

甥あつ子にせうくもおもふ 鬼貫

松より竹より桃よ継ぐ本毎 原水

晴る乃よいのさるに也なき 鶏賀

人信るもや世栄あふん 百丸

けろはくとも候内へ水はく 之白

月より来るよの魂を揃ふり 雨伯

納聘乃あつくいはく乃秋 原水

こゝろあつ海を秘積とる比 愚貫

け清あまをまにまゝ起師 百丸

はぶく珠教よ罪ハをん 鶏賀

肌わげハ刀疵ヤク矢疵ヤラ
西伯

藤乃戸のく風をまはして
之白

おまよふ合点とあらもそんぞ
思貫

まよふや乳母メドにメふようもくれ
原水

貫ツいふ入るものそ忘れ貝
鶏賀

いそりあきてはけぬ猪イナ
百丸

前メくたにあまると照ツるてはるま
之白

ねおをくろ乃初ハか子コ賣ル
雨伯

花青葉残る祇園乃胡鼓
原水

はめいふに恋りもまお
鬼貫

はあひもき音よ負く勝月
百丸

よや寝くして燕ツはく
鶏賀

三
あまより南大門乃く
雨伯

親よおとぬ上ウまをけり
之白

あまのちいよ常乃倒タひ
鬼貫

三山がひつ乃申の丑ウれ目
原水

凡をよふんの内うたかたね
鶏賀

馬引じけ。書乃ゆき
百九

あうたを必治の海をやに
之白

目よまへきを雪をうり
兩伯

粟葉海無ひく九十九
原水

七のよたをふりて
愚貫

鶏籠を敷くぬり只佛を
百九

好珠乃衣をうり
鶏賀

歌ゆき歌をげり立馬帽子
兩伯

夕月けりて宿物や
之白

^{三ツ}妹風いさ乃抱り通ひつ
愚貫

何り契りて
原水

此鳥乃あつては
鶏賀

おの隠れりて
百九

平の首よあは
之白

何やまきり
兩伯

呪咀ミジナフ

レ

解毒之人持ぬ國土人取人 原水

山も柔和く木も於麻より 鬼貫

世に多しけむるよふけらるるの針 百九

血筋整く乃ち好むはもたふ 鷄賀

皆丸い心を轉く言の窟 兩伯

あはれこ道はいらるるてまふ 之白

乳ひつる月を花と明くも 鬼貫

何れも柱とおもふも乃稟 原水

名

うらこの弦とよびもやうふに 鷄賀

眠るも証いさくさく 百九

指子本はひりあるもこらむは 之白

石よりまをまをまを入梅 兩伯

心も湯は清くも有る山 原水

空よ文や好くもたふを 鬼貫

老も人主がおもひの漏やれ 百九

離もく俗乃何れもたふ 鷄賀

饒り琵琶彈傳一好のやと 兩伯
 心乃外能福原まゝあ 之白
 此私の片帆を解るあづけり 鬼貫
 物の書まゝる程も照了月 原水
 あやまゝる時ゆゑにさへ 鶏賀
 捨遣ふまゝ一白浪乃幾 百九
 以後に子運や内所強うとに 之白
 百首入り能るあまゝいふ 兩伯

満

やゝゝとあ乃難向何前うてい 原水
 人多起ゆまはまねふとて 鬼貫
 胡印乃里やう駕を吹まゝ 百九
 之やしの市へ新程も如く 鶏賀
 花やうにあ乃合や候ゝ此や 之白
 はの煮まゝのうまゝとあまゝ 兩伯

百九十七 鶏賀十七

雨伯十七

之白十七

鬼貫十六

原水十六

鬼貫亭真行祝ひをさうふ

花流や増えく乃家つゝ

鶴賀

しよひ燕とぬる春風

鬼貫

京乃谷もをあらもく晴

原水

一志のほ雀しき

之白

百足乃身浅ぬり

雨伯

とらぬがまのさや

執筆

旅多しはははらへし〜 蝶す〜 愚貫

雨乃ははらへし〜 其甚し〜 乃なれ 鶏賀

羊〜 ぬ糸〜 福り酒〜 乃〜 之白

雪乃中〜 乃〜 郭五文字〜 乃 原水

雪乃中〜 乃〜 郭五文字〜 乃 鶏賀

途は〜 乃〜 小晦日 雨伯

隠〜 乃〜 佛り〜 乃〜 乃〜 原水

妙〜 乃〜 乃〜 乃〜 乃〜 愚貫



三上止不〜 乃〜 乃〜 乃〜 雨伯

親子乃名系海〜 乃〜 乃〜 之白

半〜 乃〜 乃〜 乃〜 愚貫

取明〜 乃〜 乃〜 乃〜 鶏賀

屋〜 乃〜 乃〜 乃〜 之白

魁角男〜 乃〜 乃〜 乃〜 原水

乃〜 乃〜 乃〜 乃〜 鶏賀

待幸乃法ノ爾〜 乃〜 乃〜 雨伯

今銀ふくまふはぬめぬ

昼も夕も雲はくらくれ
鬼貫

はやくとあまのうせうはやく
雨伯

使の文もあまのうせう
之白

候初もあまのうせう
鬼貫

神を月乃初もあまのうせう
鶏賀

夏の月もあまのうせう
之白

減の程もあまのうせう
原水



春の月もあまのうせう
鶏賀

初起好もあまのうせう
雨伯

もつとあまのうせう
原水

しつとあまのうせう
鬼貫

聲がひにあまのうせう
雨伯

海もあまのうせう
之白

あまのうせう
鬼貫

あまのうせう
鶏賀

鳥乃眠て後入 鳥 鶴 之向

まじおころを悔じ後也 原水

これこたへて才の遠らきぬ白拍子 鶴賀

まろく入はくくぬむくせむじ 雨伯

何心あふくぬ葉六のひくく 原水

あそこくく解てかき底くまのま 思貫

貫くくく信りくくぬぬれらむ 雨伯

まじり蛇の茶の飲くく 之向



留くく其の魚をぬくく 思貫

喜りくくまのくくは夕月 鶴賀

見もぬぬをぬくく先ん 之向

歌射初るくくく 原水

万葉に権倉のまのくく 鶴賀

まじり通るくくぬれらむ 雨伯

まじりくくぬれらむ 原水

まじりくくぬれらむ 思貫

三

漕あゝもくやどくくつ陸の洋
西伯

もくもまをせにくく
之白

拍子も後をくくくく
鬼貫

まゝくく馬乃癖をかふた
鶏賀

若宮乃報喜に名物のけ
之白

色もくくくの名張り
原水

おまひげ月を起くくく
鶏賀

系類あゝく湯衣た
西伯



年あゝくくく
原水

咽乃かろくもせられ
鬼貫

三
三
南山のたよ風が清き
西伯

何くくく母よ
之白

う取乃教賀くく
鬼貫

満ゆく見おる
鶏賀

ひくくく地
之白

眉月くくく
原水

うら初乃盡ぬはゆいす〜
鶏賀

何ん〜除夜の夢うね〜
雨伯

明^{ミタ}〜
原水

先大井〜町を〜
鬼貫

東よのひ〜各別〜
雨伯

〜
之白

月結〜待の〜仕事〜
鬼貫

あ〜は〜
鶏賀

名

ちのち〜
之白

一〜
原水

あ〜
鶏賀

痘^{ツクリ}〜
雨伯

去〜
原水

〜
鬼貫

か〜子に〜
雨伯

〜
之白

おととい乃あまのめは日とも世ぞ 鬼貫

小笹もろやあも並うくく露 鶏賀

は月夜陸の坪今日起くくあ 之白

い川入も流が坂の彼岸う 原水

裕く小神を移す心う 鶏賀

とやく云揚く我もおうう 雨伯

宵ふ人のあまはうきもの物にあ 原水

清水坂よりうくくまけり 鬼貫

満

あま乃之日を平れく山花や 雨伯

鳥遊くくま程くくまに 之白

人並乃長栄の上はくくあ 鬼貫

あまに更くく万代の片 鶏賀

さか乃松あうわくくあ 之白

老う此水と惣領乃くくあ 原水

鶏賀 二十 鬼貫 二十

原水 二十 執筆一

之白 二十

雨伯 十九

野遊

あふのけしと花のまの徳妻のれ

雨伯

まう郎とあけよ戸まんは

原水

うは白と月をまのあはしうまう

百九

礎乃節流川海隔家

鬼貫

産のまよとまのまのまのまの

之白

虫く虫乃中此玉虫

鷄賀

幾間も志まぬ法殿の座す乃
執筆

かんろきあしきそあれ
雨伯

甲子を大いさの氣むし
原水

人かろくはあしあ
百丸

吟の媛乃まげえあらしむ
愚貫

たのまきくは観音の慈悲
之白

何となくよき世渡り書作
鶏賀

えれりしつじ夜乃川音
原水

下ハ皆笑はさるるに
雨伯

おこりておどろきあしあ
愚貫

理窟よりやしきあしあ
百丸

いそりしひきあしあ
鶏賀

蓋しれはゆるゆる
之白

房若存若乃穢をさる
雨伯

皆人の闇より飽き月夜は
原水

あしあしああしあ
百丸

二
袖斗除のるるを
鬼貫

佛の道く坂母向い
之白

そりの宝珠持く生れ
鶏賀

雲をたつし、唐土を私
原水

ほん乃く皆いあらぬの音
雨伯

年乃香深き神のし風
鬼貫

聯月野う鳴たる玉信杯
百丸

地く唐の海まく漢宮
鶏賀

志く乃塔をぬくまのふ
之白

江くやう文の上よさ
雨伯

列くちたまけく皆い
原水

ゆがめくゆい鏡界
百丸

けらくをふの洞
鬼貫

門外ちり馬をす
之白

二
此雨くを波くを流ら
鶏賀

二百十日をけり
原水

才乃秋の果もあけよ飛子とも 西伯

寺乃ある名も世を緑氏垣 鬼貫

何知るその名を急く月の蝶 百丸

あらとと責負乃欲りしとあるら 鷄賀

火もしく肩衣けくとあらまいて 之白

茶も煮へとれの白山津の谷 西伯

初とといふとと初の何喜目 原水

去年乃日記をと笑ふあらは 百丸

寝嘗ん皆命の中を銘をとく 鬼貫

んがといふととあらまいて如小便 之白

不成戸を今はり入相手 鷄賀

鬼筋といふととあらまいては科あら 原水

結乃子もう記を山水のあらまいて 雨伯

きのよ乃今のいよ眠まあらう 鬼貫

う記事は名もとあらまいて將をとく 百丸

留之乃記按は白粉もんどり 鷄賀

鍋の底に赤い糸を巻く
之白

園子より並ぶ魂乃お解
雨伯

師走より暑くま
原水

飛べや蓮乃實業と
百九

降晴く首乃控輿トコの月
鬼貫

はかまを解く流まよ
之白

忘れくそゆあけ
鶏賀

耳乃遠く又くは罪
原水

いづくに
雨伯

雛子紙巻く
鬼貫

三
ようしと
百九

茶の酔事
鶏賀

控ぬ
之白

下
雨伯

夏ま
原水

錦乃足
百九

雪水に心流るる雄車 思貫

糸のむすま月ハ始あり 之白

虫乃青よありぬ個子とあふ何ぞ 鶏賀

おすひつひとも白信りたき 原水

利つともんて志はは原魚 兩伯

八坂乃前々おれもこのは 鬼貫

氣をく程とくくおれもたのふ 百九

はる羽織を春の命トッ 鶏賀

各

糸長乃ねくくもく椽の端 之白

緩い机乃さびくはく 兩伯

おねく子に志さくももたは 原水

目陰はききたを難業のふ 百九

夕影乃權よぬくけく家出く 鬼貫

還俗志くくもくおれも 之白

流るるいこのはくは今れ月 鶏賀

息はるるけく飛くア 原水

確乃響あり〜比叡あり〜

兩伯

此子摘めはあれ草にゆ〜

鬼貫

婦連乃諫をさうそ〜尾〜

百丸

あ〜〜さほむか〜世と〜

鷄賀

おつげよ〜節〜ぬと〜〜

之白

た〜〜と〜と〜似ぬ産心や

兩伯

満
清濁流いふはに解〜〜

原水

ぬお〜〜ろ〜〜

百丸

笑も花明る事〜疾起〜

鬼貫

縁〜〜あ〜ゆ〜〜

之白

蔭影〜〜まの云〜〜

鷄賀

清〜流〜〜あ〜と〜見〜

原水

ま〜〜の僧拜ち〜〜

兩伯

石乃鏡〜鳥の〜

鬼貫

兩伯 十七

原水 十七

百九十六

鬼貫十七

之白十六

執筆一

鶏賀十六

春

心くひにぞよき山く花を食 百九

定家のつまらさ中よ抱くえ給ひ

いとよんばえく一親世音のこそせ

はまよよちちるーかえ

ふゆわくたぬくやまも抱く所ん 柳うけ

勝月よふ夜中のまもごう一麻ぶき 鶏賀

親類とくくや梅く二三目 之白

日私了る習いも好く花墨 原水

二七二七二七二七 吾書よりありては
けしむれ教くしぬめき

江戸色紙すかん花子も初木立 花志

手紙よりよきや老切山より花 翠柏

咲花より度りも隣ん山乃神 可白

冬やん花起す窓も色 賀水

小押すて

勅額より下に白よや梅乃木 雨伯

子貴壺山

阿部のいれありての梨子乃花未置 尾貫

あつたあつたぬ目教はるるる花 鶴賀

箕

手紙花のよむとむるにけしむれ 柳

都へかゝるも宮路のあやかしや 鶴賀

早しつ流るるやとて寺後川 翠柏

大佛

すくすく何れかやむと魚ふ 百九

うつくしきやまを昼とてゆめて この自

らたむせすいのみいひ風薫る 雨伯

神風野坊之幽居

昌翁の住人の巢はうらやまを
錦やまのうらやまや梅のふと吹
てうらやまのうらやまのうらやま
莊出居 梅花仲とて居眠る

おもふく生なす死しあまの氣味
なまきくまきくや行基菩薩六万事
まゝらひすて一切を捨れまきく獨
なまきく死しあまのうらやまのうらやま
たよとく 或日紫蘇をまきく
柱の板底なまきく雨は朽て月の
めあまきく 坂は只坂の風とまきく
らひす一石なまきくまきく名は
もまきくく石の鼎し古に瓢箪
すえて富家の歎炭と亦灰とな
らんの語を示す而已惟然とて物
なり須臾をまきくまきく
暇味なまきく 一もまきくをわきく

まきくまきくて安なまきく 桜樹のふ 百九

志あるは夕々後を其く 之白

川中よまよる人申すまことし

五月五日の流しは竹の音 系水

妹

一掃を物り影を記すも今宵 一

踊見の夜子も空もいれ世に形 系水

心暗起す旅の山風は音 尾貫

まよふまの胡魚乃向と暮る外 桃姫

まよふまの歌りよも妹の歌 慶志

はとまよひ種屋の舞や娘の風 友向

友越て妹をいふも信は人 翠梅

九月書

行ひてまよふ歌を淋し果明く 之白

今更にまよひるは色蕉なれ 鶴賀

何れと覚えぬもあやうく枯る 之

むしや今やうつく妹の音 柳

つる程は何くかとうと胡の如く白

暖かき〜

鹿やうに死にま〜あま〜山百丸

冬

木草に雪の程如く山お如く〜 葉箱

うらやぬ公の真や冬うらやぬ 雨角

困居候とよ

肩をぬい夜乃衣や雪の友 之白

賀茂屋のや〜 浴衣

袖〜やた〜まゝた〜冬木立 系水

を

妻より此や姉湯を結題よ〜 冠黄

一とこの猿座よ

思ふ乃宿よ〜あは涼

か〜よ〜出ろ候〜

宇津の山〜で家着て笠の如く 鶴賀

氣てまつゝ物に男と新い松 之白

麻雲麻白水翁乃

原水

たもと取詩の白ひたり後此炭 百丸

何解と定めぬ冬うゝれまおま づおま

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

歌仙

いゝゝゝと歌と書よりの雄乃空 原水

吹まゝの風、麻の音は踏 百丸

そ終といふ日、所よ名代ありく 之白

さう向ふはゆの葉はゆいゝ 鶏賀

色く、編る竹の器物 兩伯

都々々ぬゝ云をよけきれゝ 鬼貫

月けしに窓をあくる九折 執筆

百合も浄土と西に向ふし 原水

麦食よ原産しついであられ 百九

とやかくすねと親の位よりと 之白

はしつゝいふてまゝに成るるは 鷄賀

夢も癒ゆる年乃夜心 雨伯

そねつゝ思申しもろ白髪 鬼貫

簾乃歌と云りも慰し 百九

とよよれ風乃動る水の西 原水

巻よ桂よ持あひり影 鷄賀

鼓うの高雄のけし物めし 之白

春乃折る月のほろもろ 鬼貫

似合ふと着きたるも是と考ふ 雨伯

まよふ機極の程もろね林 原水

まよふ文の布もぬ苦ねと結 百九

ゆかぶらよ獨雨もろく 之伯

名

為ても神の神乃取も

鷄賀

木爪やけしの餘をふ

雨伯

孫少いよはりの果つる馬

鬼貫

らうらうと出でて樂て

百丸

玄種く何んか月乃也

原水

為に分り風の付い

鷄賀

はくろの鶯も鶯も

之白

百もく樂と

鬼貫

満

それらわ賣群いつも

雨伯

あやさや鐘のし

原水

志つくれ者の到候を奈

百丸

らまれ具足と

之白

花踏もほ

鬼貫

らあむ極乃

鷄賀

原水 六 雨伯 五

百九六

鬼貫六

之白六

執筆一

鷄賀六

兩吟

うらた物あきささる地は輝乃夜

鷄賀

まろぬく葉の胡ふれ

鬼貫

そらうく底よは春のあまき

全

かゝる月代杉鮎けり

鷄賀

扇置事ハ若乃か記酒そら

全

万々れま時ひつ

鬼貫

梅は白い乃と淡く一乃と 思貫

隈と雲の真わくさきよ 鶏賀

ありよとのれ比るる響乃乃 思貫

おのまを化し肩伝り 全

いつまゝ起るもおの 目此罪色 鶏賀

刺まは佛乃ま似も成とて 全

燈も火をけとあ物と念乃下 思貫

瓦乃屋根も其た夕とれ 全

蚊は乃為まきくもあれてま 鶏賀

たふれたるおは乃昔屋乃 全

たむらうさよの月丸イモアライ一口 思貫

ねの彼岸乃小屋いれぞよ 全

床を喜よ床は被の意とる 鶏賀

つきあもこよは徳すよの散 全

人しき心やる空を花と語カタ 思貫

あくびの餅もまもりける 全

さほきい又さほきわくら割の 鶏賀

世さほきわくら割のさほき 全

乃のさほきわくら割のさほき 鬼貫

障子さほきわくら割のさほき 全

さほきわくら割のさほきわくら割 鶏賀

只さほきわくら割のさほき 全

石乃火れけくらさほきわくら割 鬼貫

夜さほきわくら割のさほき 全

さほきわくら割のさほきわくら割 鶏賀

さほきわくら割のさほきわくら割 全

正月の道さほきわくら割のさほき 鬼貫

血乃のさほきわくら割のさほき 全

十六のさほきわくら割のさほき 鶏賀

うさほきわくら割のさほき 全

さほきわくら割のさほきわくら割 鬼貫

けいさほきわくら割のさほき 全

雨々々お〜毎乃四山あ〜
鶏賀

晴〜ハ志もあ〜雲乃あ〜するま
全

掛つ〜心乃格々皆〜
鬼貫

後〜鏡の我〜ゆ〜
全

朝〜鳥〜きのの〜
鶏賀

〜吹〜の東〜
全

〜月〜の世〜
鬼貫

〜茶〜の谷〜
全

百代乃あ〜
鶏賀

〜吹〜ぬ〜
全

春〜る〜に〜
鬼貫

〜下〜の〜
全

川筋〜
鶏賀

〜ほ〜の〜
全

地〜
鬼貫

〜あ〜
全

三

母方の伯耆とや〜にあるうかれ 鶏賀

まのひら〜て葉〜すれ 全

それ〜〜無名草も〜あは〜 鬼貫

五文字〜〜はあ〜と 全

坂〜羽織〜も〜あ〜 鶏賀

八咫子〜んで何〜あ〜 全

花房〜が斬〜り〜あ〜 鬼貫

〜〜〜玉章〜乃蔓 全

脇は〜の〜あ〜〜あ〜 鶏賀

祈〜神路〜あ〜〜あ〜 全

三ウ
一〜せ乃枝の〜あ〜と〜あ〜の〜あ〜 鬼貫

醒申〜餅の〜あ〜〜あ〜夜 全

亥令乃方とあ〜〜あ〜〜あ〜に 鶏賀

百す〜乃春あ〜〜あ〜の 全

初意乃あ〜〜あ〜〜あ〜種 鬼貫

志〜心〜あ〜〜あ〜〜あ〜 全

雪に耳とを翫ふとおもへるを 鶏賀

いづれを鳥よりいふものぞ 全

發心乃月とてんるあつたなり 鬼貫

先まじはる編書乃る巻 全

口ぬも益とてたよ種の白ひ 鶏賀

一海を井筒の通とほらば 全

老げく故乃るしうとて 鬼貫

幾の塵うらなを呼とて 全

名

曉乃雪と氷悟ちる音たきど 鶏賀

はくこて音乃事。悔い 全

箭くと現ゆとれ船の上 鬼貫

夕日にぬまると石乃名れさ 全

櫻乃實れ踏けりてつに 鶏賀

祓ひ乃筒れ影をくら張 全

水鏡の家伯母より真も妹やある 鬼貫

おれが筆とて流るがうとて 全

意種れとれぬをよよは 鶏賀

い川音乃夜の早成教つる 全

酔一とて中くましくや 鬼貫

うき今比と生歌趣より 全

是は物とさうぬけりて 鶏賀

節乃整り能空を伝ふや 全

満 房よといさくまのえくま 鬼貫

壁乃より伝はれぬとや 全

甲の角にさくまのつげ 鶏賀

み川乃汐、網へやうら 全

と、度わう都乃外を踏ぬて 鬼貫

そいで空乃花うあひる 鶏賀

井れ是もえきわね庭の蝶 全

ゆらりとあつ風あつる空 鬼貫

鬼貫 五十

文臺記

みじろけ山の麓を立田法川の錦
より別取山の麓に今に奈良
鶏賀の家よりなましころとせし
その名は照す寸法は 高 三寸歩
横 一尺九寸
裏

別取山満願寺尊悟
寺住之時興昌寄進之

と朱と瓜をくへあり荷擔はひりの
蝶座くく白ひて夕よ月をばさひ
胡よねく山のありと志くよ三月
目とこくく人よ流きくくあめぬ
彩くえ眼くく尻くやをくくくく
をとおよよいくくく人の心は
種とたりんくくくくくく
のそよ乃教さえずくくくくく
くくくくくくくくくくく
亥の蝶葉のまじくくくくく
くくくくくくく

ひくく色は

花の葉ふ

あつは

くくくこの葉や扇くくくくく
表白くくくく世よくくく
と地の聲くくくくくく
くくくくくくく

寄文基詞

為相のけくくくくく
とくくくくくくく

称名寺に在りては
あつゝはきにけり
別一山満願寺の
今江原氏乃家
まきりては

月雪れ吉びを
百九

まきりては
まきりては

死鳥は時代は
紅葉つ
鶴賀

忘

流し髪は
鶏賀

不^{アハテ}遠^{アハテ}の
水

初^{アハテ}居^{アハテ}の
水

契不遠忘

油はあつゝ
鬼貫

賀

玄のふれは種拾ふるのうれ 愚貫

世を空り雛のひふ産じよふ 賀 鶏賀

うらやまのこゝろ

春のこゝろ

事象のふれは種拾ふるのうれ 鶏賀



